

の活動について



土井 国春
研究部長

1 「ウィズコロナ」の中での研究部の活動

新型コロナウイルス感染拡大によって、オンライン会議やテレワークなど新たな生活様式に基づく業務形態が浸透しました。一方で、令和5年下半年には、対面、参加を基本とするかつての日常生活や経済社会活動を取り戻す動きもみられ始めました。学校教育においては、GIGAスクール構想の推進によって、全国各地で、児童生徒が主役となる新しい学びやクラウド環境を前提とした教職員のより効果的で効果的な働き方が生み出されています。そうした現状を鑑み、令和5年度は、今後一層、その変革の基盤として推進が期待される「DX」に着目し、「教育DXの推進と学校としての取組と副校長・教頭の役割」をテーマに実践研究を進めてまいりました。

2 研究大会・研修大会の内容

(1) 全国研究大会（石川大会） 8月3日、4日開催

石川大会は、参加型とオンライン型を組み合わせたハイブリッド型で行いました。石川県の実行委員会の方々の綿密な計画、準備と献身的なご尽力により、石川県金沢市の7会場に参集1,300名、オンライン1,900名が参加する研究大会として開催することができました。研究集録をホームページ上で閲覧できるようにしたことにより、研究大会の

趣旨や内容を全会員に知らせることができました。

(2) 全国研究部長会（第1回7月7日開催、第2回12月1日開催）

第1回は7月7日にオンラインで開催しました。午前中に全体会を行い、「研究部長としての活動の状況」、「各学校における管理職としての課題」について意見交換しました。午後は、東京学芸大学教授の高橋 純氏に「個別最適な学び」と『協働的な学び』の一体的な充実に向けた副校長・教頭への期待」との演題でご講演をいただきました。

第2回は12月1日にハイブリッド型で実施しました。午前は全体会とグループ協議を行いました。午後は、春日井市教育研究所教育DX推進専門官の水谷年孝氏に「1人1台端末＋クラウド環境の日常的な活用による主体的な学びの実現と校務・研修改善」との演題でご講演いただきました。両日とも、第一線でご活躍なさる方々から理論、根拠に基づいた具体例を踏まえたお話を伺うことができ、参加者から高い評価を得ました。

(3) 中央研修大会（2月8日開催）

約900名が、講演とシンポジウムにオンラインで参加しました。基調講演では、田中博之氏（早稲田大学教職大学院教授）から「学校DXの推進と生成AIの活用について」との演題でご講演をいただきました。次世代のGIGAスクール構想の在り方について「知識活用能力」、「創造力」、「AI活用」をキーワードに説明くださいました。小学校や中学校の先進事例をもとに、生成AIの活用のポイントも示していただきました。シンポジウムでは、テーマを「教育DXの推進と副校長・教頭の役割」として、中川斉史氏（徳島県教育長）のコーディネートのもと、大城智紀氏（沖縄県教育庁県立学校教育課教育DX推進室主任指導主事）、中尾教子氏（神奈

川工科大学情報教育センター准教授）にそれぞれの立場から、教育DXに関する示唆に富むお話をいただき、今後、副校長・教頭としてどのように推進していくべきかについての方向性を示していただきました。

3 研究大会・研修大会の成果と課題

全国研究大会石川大会は、令和元年度の滋賀大会以来4年ぶりに参集で開催しました。オンライン開催が続く、参集開催のノウハウが薄れる中、過去の研究計画を参照し、緻密に計画し準備をしてくださった石川県実行委員会ならびに石川県の副校長・教頭先生の皆様のおかげで成功裏に終えることができました。オンライン開催も併用し、全国の会員が、地元にいながらにして、石川県で繰り広げられた貴重なご講演、熱い研究討議等の学びを共有することもできました。

研究部は日常的な連絡や協議をほぼ全てオンラインで行いました。研究部長会、中央研修大会を通してウエビナー等のオンライン配信、ハイブリッド形式の大会開催の経験値も高まってきたと感じます。今後も、目的や趨勢に応じて最適な方法を選びながら、副校長・教頭先生の資質・向上に寄与する研究・研修運営を行ってまいります。

